

コミュニティドクターの養成を通じた多職種・多業種連携の推進と住民との協働によるつながりの創出

密山 要用 ●東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 医学教育学部門 客員研究員



団地祭りで、店番をするグループホーム入居者の方々とともに

1. 背景と目的

我が国は、世界一の超高齢社会を迎えており、すべての人が最期まで健康で生き生きと暮らすためには、既存のヘルスケアサービスを越えた共助によるケアが求められている。

そのためには、多職種が連携する地域包括ケアの推進にとどまらず、商店やアーティスト、建築など多業種での連携、そして市民らが協働した共助によるケアを実践していく必要がある。そして、このような協働を実現できる医療人材の養成も不可欠である。特に、コロナ禍で感染症に配慮しつつ、生き生きと暮らすための知恵をローカルな形で再構築していくことが今後の課題である。

2. 取組みの方法／期待される成果

地域共生社会を実現できる医療人材である「コミュニティドクター（以下、CD）」の養成プログラムを立ち上げる。

世界最大の人口密集都市である東京で、高齢化と外国人増加などの課題を抱えるある団地を対象として、商店街や外国人支援NPO、社協、包括、そして団地住民らとの連携、協働による健康づくり、地域づくり活動を実践する。CDとしてまちづくりに健康づくりの知見をうまく交え

て関わっていく。

特に2019年度は、団地での祭りの準備、運営への参画を通して連携を進めてきたが、コロナ禍のために集まったの話し合いや活動が困難であり、オンラインによる地域のキーパーソン間のネットワークの再構築から行っていく必要が生じている。

特に都市において困難な「顔の見える関係」について、多様なステイクホルダー間で構築することで、地域の困りごとや生活の知恵の共有が進む。さらに、小さな地域の課題解決を一緒になって一つずつ行うことでコミュニティ間でのつながりが深まる。

これにより、課題解決のための経験の蓄積と、そのために動ける市民が増え、長期的には都市で健康で生き生きと暮らしていける生活の場、特に感染症に配慮しつつ、生き生きと暮らすための知恵が生きた生活の場が作られていくことが期待できる。